

モグール・ウルスの駅伝制とその後 — 南遷前後の事例比較による一考察 —

早川 尚志

本報告では、チャガタイ・ウルスの東西分裂後、東トルキスタンの地を占めたモグール・ウルスにおける南遷以前(1347/48頃～16世紀中葉)と南遷以後(16世紀中葉～1678)の各々の交通体制について、宿駅網と通行証の観点から実態とその変容の究明を行ない、モンゴル帝国解体後の内陸アジアの交通制度の在り方の一端を明らかにした。

前近代の諸王朝にとって、領内の情報と物流を如何に掌握するかはその死命を決する重大事であった。中央アジアの諸王朝にとってもことは同様で、殊にモンゴル帝国において站赤制の名で知られた駅伝制度はユーラシアの東西を結び、その空前の広域支配を可能たらしめ、その後の大陸各地の後継王朝の交通制度の基礎となった。

然るに、モンゴル帝国の心臓部を占め、その後モグール・ウルスの支配下に入った東トルキスタンにおいて駅伝制がどのように継承・変容されたかについては先行研究からは必ずしも明らかでない。それ故、本報告ではこの空隙を埋め、16世紀の南遷を挟んだ両時代のモグール・ウルスの交通体制を検討・比較することで、モグール・ウルスが遊牧社会を維持して天山山脈の両側を抑えていた14-15世紀(前期)に領内に行なわれていた駅伝制が、そのタリム盆地への南遷後の16-17世紀(後期)には破綻してその機能を失い、交通路の変遷にさえも影響した可能性について検討を加えた。

(京都大学大学院文学研究科)